

# 今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響

星 田 公 一

## 一、『今昔』における本話の位置

『御伽草子』の中の『鉢かつき』は継子譚として有名な作品であるが、その中に、「山蔭の三位中将」という人物が出てくる。この人物は、継母にいじめられ鉢かつき姫が家出をし、河に入水自殺を図るが鉢のために沈まず流れていくうち舟人に救い上げられ、その異様な姿態を笑われ途方にくれているところを、屋敷の湯殿の役に拾ってやるのである。この事がきっかけで、鉢かつき姫はその家の四番目の男子である宰相殿御曹子と結ばれ、末繁昌となるのである。従って、鉢かつき姫はこの「山蔭の三位中将」により苦難の人生から脱出できるのであって、非常に重要な人物といえる。

歴史上、「山蔭の三位中将」なる人物は実在しないが、「藤原山蔭」あるいは、「山蔭中納言」と呼ばれている人物は実在していて『今昔物語集』を初めていくつかの説話に登場している。「山蔭」と

いう名前は珍らしく、『鉢かつき』でいう「山蔭の三位中将」と無関係とは思えないので、この人物の解明が、『鉢かつき』の成立を知る一端ともなるだろう。そこで本稿では、山蔭中納言を中心とした亀報恩譚を現存の文献の中で、最も早く記録している『今昔物語集』巻第十九第廿九話の構成をみることにし、その形成過程と後代への影響について考察してみたい。

まず『今昔物語集』(以下『今昔』と略す)の話の概略を示す。

今は昔、延喜の御代に中納言藤原山蔭という人がいた。この人には多くの子があつたが、とりわけ一人の男の子をかわいがっていた。継母もまた、中納言以上にかわいがっていたので、父の中納言は喜んで、すっかり継母にまかせて養わせていた。そのうち、中納言は太宰府の長官になって九州へ下つたが、継母はなんとかしてこの子を殺したいと深く思い込み、船が鍾の御崎という所を過ぎる時、この子を抱いて尿をさせるような

ふりをして海に落とし入れた。そして、しばらくしてから「若君が海に落ちこまれた」と泣き叫んだ。

中納言はこれを聞いて、海に身を投げんばかりに泣き惑い、「せめて子どもの死体でも取り上げて来い、それまでここに留る」と家臣達に命じ、小舟で探させた。

家臣達は一晩中海を漕ぎまわったが見つけられずにいると、明け方波の上に白ばんだ小さな物が見え、漕ぎ寄せて見ると、その子が大笠のような亀の甲に乗っていたので、喜んで中納言に差し出した。中納言はあわてふためいて抱き取って喜び、泣き入ってしまった。継母は内心意外なことだとは思っていたが、同じように泣き喜んでいたので、中納言もすっかり信用していた。

こうして船を進めて行くうちに、中納言は疲れて昼間寝入ってしまったが、その夢に亀が船のそばに首を出して「以前に淀川の河口で鵜飼いに釣り上げられたのを助けていただいた亀です。なんとか御恩返しをと思っていましたが、継母が若君を海に落とし入れたのでお助けしました。これからこの継母に気をゆるしなさいませように」と言って、海に首を引き入れたかと思うと夢がさめた。

その後、中納言が思い出して見ると、夢の中で亀の言ったこ

とに思いあたることがあったので、継母からこの子を離し、乳母をつけて自分の船に移した。九州に着いてからも、継母をこの子に近づけなかったので、継母も感づかれたと思い何も言わなくなった。

中納言は任を終えて京に上ると、この子を法師にして、名を如無<sup>にまむ</sup>とつけた。一度は失せた子なので、無きが如しとつけたのである。如無は山階寺の僧となり、後には宇多天皇に仕えて僧都にまで出世した。継母の方は、中納言が亡くなると、実子がいなかったので、継子である僧都に養われた。

「あの亀は恩を報じただけでなく、人の命を助け夢見せなどしたのだ。ただ者ではない。仏菩薩の化身などだったのでないか」と思われる。

この山蔭の中納言は摂津国に総持寺という寺を造った人だと語り伝えたとのことである。

本話は、亀報恩譚に継子譚が採り入れられた形になっていて、それだけでも特異なものであるが、亀報恩譚としてだけでも他に類を見ない特殊なものとなっている、すなわち、島津久基<sup>③</sup>氏のなされた助命者を中心とする次の分類によると明らかになる。

(一)助命者に福宝をもたらすもの

(二)助命者を竜宮に伴うもの

〔三〕助命者の危難を救うもの

〔四〕助命者の家族・特に其の子の危難を救うもの

この分類中、(一)(二)(三)の例話は、島津氏が詳しく考察されているように、印度・中国・朝鮮・日本に、それぞれの類話も含めて多数あるが、(四)の例話は、この山蔭を中心とした話しかないのである。しかも、『今昔』と同じ構成を持ちながら、父を藤原高房、子を山蔭とする『長谷靈驗記』の話が一方にあるので(四)に属する話は、藤原山蔭一族と関連して作り出され、伝承されていったものと思われるが、特に放生の報恩が直接的でない点、つまり助命者の子の危難を救うことに重点をおいて作られ、伝承されていったものと思われる。

この特殊な話を『今昔』の編者はどのように入手し、どのように『今昔』全体の中に位置づけようとしたのか。そして、原話が現存の『今昔』のものと同じものなのかどうかを検討することにより本話の成立状況が解明できると思われるので、次に本話の前後の話との関連性を見るために、表題と概略を記すことにする。(概略は、岩波版日本古典文学大系本のものを用いた。また便宜上、第何話の部分を上になわした。)

第廿四「代師入太山府君祭都状僧語」(衆僧の躊躇に不拘、師の命に代るべく只一人太山府君に命を捧げんと志願した僧某は幸

今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響

い事無きを得、後永く師の寵を得た。)

第廿五「瀧口藤原忠兼敬実父得任語」(得任の雨に濡れ行くのを、

実父と知らずして笠をさし送り届けた滝口忠兼は後君寵を得た)

第廿六「下野公助為父敦行被打不逃語」(馬弓に的を悉く射外した下野公助は、父に衆前で打擲されたが、よく堪え後君寵を得た)

第廿七「住河辺僧値洪水棄子助母語」(洪水に子を顧みず母一人を救った法師某は、子を愛しむ妻に面罵されたが、後、子も亦下流で人に助けられた。)

第廿八「僧連円修不輕行救死母苦語」(惡道に堕ちた母を救うべく釈連円は諸國をあまねく歩き不輕の行を修して初志を遂げた。)

第廿九「龜報山蔭中納言恩語」(本話

第三十「龜報百済僧弘済恩語」(百済僧弘済が海賊に水中に投ぜられるや、嘗て一命を救われた亀は直ちに來り之を助けた。己れから奪った金を売りに來た海賊と備後の海岸に遭った弘済は寛大にも之を不問に附し自ら金を投じて購った。)

第卅一「鬻骸報高麗僧道登恩語」(高麗僧道登に葬られた鬻骸の靈は、己が命日にその童子を、とある一軒家に請じ食を供し

た。霊は、其の家の兄に山中で殺された弟であり、その日は彼の命日であった。）

第卅二「陸奥国神報守平継叙恩語」（平継叙に再興された陸奥の某祠の神は、彼の上京の途を守り、また常陸守に任せしめなどして彼に恩を報じた。）

第卅三「東三条内神報僧恩語」（常に読経の法楽を受けた東三条の神は、一日恩を報ずべく僧を樹上の宮殿に請じ食を供した後覗き見をするなど戒めて暫く奥へ入った。禁を犯して覗いた僧は、四周に、節日毎に京の人士が遊び集う楽園を廻り灯籠の如く見た八末欠。）

〔第卅四「比叡山天狗報助僧恩語」〕諸本文

第卅五「薬師寺最勝会勅使捕盗人語」（薬師寺の最勝会の帰途、奈良坂で山賊に襲われた弁源某の老侍は不思議にも賊魁を捕えた。）

以上の順序のうち、第廿四話は、僧の話であるが、君龍を受けるという点で、次の第廿五話と繋がっているが、第廿六話とは繋がらない。そして、第廿五話以降第廿八話までは、父母に孝養を尽くすという点で繋がりがあある。一方、第卅五話は山賊を捕える話であるが、前の第卅四話は欠けているものの、その表題からして報恩譚と考えられ、繋がりははっきりしない。また、第卅三話と、第卅五

話とも繋がりを持つ内容ではないので、明らかに、ここに一区切りがあると考えられ、第廿九話から第卅四話までは、報恩をテーマとして繋がりを持っていると言える。

これらの一連の話を第廿九話を中心にして見ると、前に父母への孝養を説く四つの話があり、後に報恩を説く五つの話があるということになる。（ただし、第卅四話は欠けている）。すなわち、本話がこれらの前後のグループの繋ぎの役割りを果しているわけで、父母への孝養を説く前者の要素と、報恩を説く後者の要素との両方を合わせ持っていると考えられるのである。「今昔」は二話一類形式により編纂されているといわれているが、本話の場合は五話一類となっている。

この事によって本話を検討してみると、結末の部分の後日譚で、如無が我が命を奪おうとした当の継母を、山蔭の死後大切に養っている事が述べられているのは前者の要素を持つものであり、通常の継子譚では、継母は継子が幸福になるのに反して、不幸な一生を送る形になっているのに対し、本話では継母はその罪を問われるどころか、むしろ、それを許し受け容れた如無の孝心の美しさを描くことに重点が置かれていて、本話の最も重要な部分となっている。

また、後者の方は、この継母の後日譚に続いて編者の言として「彼ノ龜、恩ヲ報ズルニシモ非ズ、人ノ命ヲ助ケ、夢見セナン

ドシケムハ、糸只者ニハ非ズ、仏菩薩ノ化身ナドニテ有ケルニヤトゾ」思エル。

と述べている点に見出し得るが、亀を仏菩薩の化身のようなものだとする点は、他の亀報恩譚には全くなく、これも本話だけの特色である。

## 二、継子譚の要素

通常の継子譚では、継子いじめが話の発端となり、当然継母は憎むべき存在として描かれるのであるが、本話では逆に、

継母有テ、父ノ中納言ヨリモ、此ノ児ヲ取り分キ悲クシテ養ヒケレバ、中納言此レヲ極テ喜キ事ニ思テ、偏ヘニ継母ニ打チ預テナム養セケル。

と冒頭で継母らしくない継母として描かれている。しかしこのことは実は後半で描かれる継母の悪らつきの伏線になっているのである。そして、継母の悪役ぶりは継子を海に落とし入れる場面で極に達する。すなわち、

継母「此ノ児ヲ何デ失テム」ト思フ心深クシテ、鍾ノ御崎ト云フ所ヲ過グル程ニ、継母此ノ児ヲ抱テ、尿ヲ遣ル様ニテ取りタル様ニテ海ニ落シ入レツ。其レヲ即ハ不云ズシテ、帆ヲ上テ走ル船ノ程ニ暫許リ有テ、「若君落入リ給ヒヌ」ト云テ、

今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響

継母叫テ泣キ唸シル。

と述べられている部分がそれである。

また、継子を落とし入れる場所として特に「鍾ノ御崎」を選んでいるが、この鐘の御崎は大宰府接近への目やすの場所であり、古来難所として有名であった<sup>⑥</sup>。つまり、わざわざ波の荒い所を選んだのであり、しかも落としてからしばらく後に泣きわめいているのである。そのため継子が助けられるということは考えられず「此レガ死タラム故也トモ、求メテ取上テ来レ」と泣き惑いながら言う父山蔭の言葉が、継子への切実な愛情の表現として生きているのに対し、山蔭を欺く悪役としての継母の像は、継子が亀に助けられた後にもさらに強調されていて

継母モ奇異トハ思ヒ乍ラ、泣キ喜ブ事无限シ「此ノ継母ハ内心ヲ深ク隠シテ、思タル様ニ持成シテ有ケレバ、帥モ偏ヘニ其レヲ憑テ有ケル也。

と述べられている。

このように見てくると『今昔』の編者は、継母の性格の冷酷さを細かく描いていて、そこに本話の前半部の重点をおいていることがわかる。通常の継子譚では継母には実子があり、その子のために継子いじめが正当化されるのに対し、本話では実子がないにもかかわらず、継子いじめをする非人間的な継母として描かれているのである

る。従って本話の発端部に継子の要素を採り入れたのは、なぜ如無が海に落ちなければならなかったのかといういわれを説明するためであり、そこから本話の説話性を示す最も重要な点である如無の命名との結びつきが生じ、その如無が継母に殺されたにもかかわらず、父山蔭の死後、継母を養ったという、前述の『今昔』における本話の位置との関連も生じるのである。

### 三、亀報恩譚の要素

亀が海に落ちた継子を助けたという事に関して、継母は自分であくらんだ事であるだけにはなはだ奇異の思いにかられているが、父山蔭は何の反応を見せていない。それは、次の夢の場面を引き出し、その中で亀自らが助けた理由を語るという場面を引き出し、さらに結末の部分、亀が夢見せなどしたのは、「仏菩薩ノ化身ナドニテ有ケルニヤ」という重要な部分を持ち出すために敢えてなされたものである。これらの展開は後代の話にもない部分であり、『今昔』の他の亀報恩譚にもない部分である。

例えば、巻五「天竺龜、報人恩語第十九」（以下「巻五第十九話」という）では、助けられた亀が助けた人の枕元に現われて、洪水の予言をするが、これが夢であるとは書いていない。また、巻九「□人、以父銭買取龜放河第十三」（以下「巻九第十三話」という）で

は、主人公の述懐とも、編者の感想とも取れるあいまいさで、亀が銭を返しに來た事を「希有ノ事也」と記している。また巻十九「龜、報伯濟僧弘濟恩語第三十」（以下「巻十九第三十」という）で、亀に助けられた後に、

「我レニ恩ヲ報ズトテ助クル也ケリ」思フニ、実ニ哀レニ遣シ。

と述べられているだけである。つまり、これら他の亀報恩譚では亀が夢の中に現われたり、亀を仏菩薩の化身と述べてもいないのである。従って、本話は夢に亀が現われるということと、その亀が仏菩薩の化身ではないかとしている点に特色があり、そのことは山蔭が夢の後、亀を助けた事を思い出す場面とあえて重ねてでもこの部分を出している事からも言える。

この事は一方、本話の拠った原話との関連を思わせる。本話は「巻第十九付仏法」の中に置かれているが、放生と報恩というテーマで充分そのつながりはあるわけで、亀をわざわざ仏菩薩の化身にする必要もなく、山蔭自身も仏教への帰依篤き人物ともされていない。ただ、最後に總持寺を造ったとあるので簡単に断定はできないが、このことも本話と直接のかかわりを持っていないので、亀を仏菩薩の化身とするのは、原話のテーマを持ち残したものではないかと考えられるのである。それは、文章表現の面からいえること

である。

亀の放生部分の描写は本話では

鵜飼有テ、船ニ乗テ来ルヲ見レバ、大ナル龜一ツ船ヨリ面ヲ指出テ、我レニ面ヲ見合セタリシカバ、極テ糸惜ク思エテ、衣ヲ脱テ鵜飼ニ与ヘテ、其ノ龜ヲ買取テ、海ニ放ツ。

とある。亀が船から面を指し出しているのは、非常に写實的で印象深いものがあるが、これは巻九第十三話にも「船ノ方ヲ見レバ、龜五ツ船ヨリ頸ヲ指出デム有リ。(略)龜五ヲ買取テ、水ニ放テ去ヌ。」とある。この話の素材である『冥報記卷上』には「江中逢一船載黿將詣市売之」とあるだけで、首を指出すという描写はない。

すなわち、既に指摘されているように『冥報記』と『今昔』とは、直接の翻訳関係にはなく、むしろこれを素材とした口語りを、『今昔』が原話として採用しているのではないかと思われる。このこととは、同じくこの話を採り入れている『宇治拾遺物語』下末一(一六四)の話でも舟より龜くびをさし出したりとあり、また、同じく『打聞集』(21)にも「龜五頸を捧げて有り」とあることによっても言える上に、これら三書に書承関係がないとするならば、ますます、口語りとして原話が存在していた可能性は強くなり、これらの描写の写実性は、実生活上の体験から来していると思われる。

後半の「極テ糸惜ク思エテ」という表現では、巻十七「買龜放男

今昔物語集の山陰中納言説話の形成と影響

依地蔵得活語第廿六」にも布を持って魚を買いに行った男が魚のかわりに網にかかった亀を海人が殺そうとすることをを見て「哀ビノ心ヲ赦シテ」布を海人に与え、亀を助けてやることになっている。また巻十九第三十話でも、仏像を造るための金を買入れに上京した弘済がその帰途海人に捕えられ殺されようとしている亀を見て、「哀ビノ心ヲ赦シテ、亀ヲ買テ海ニ放チ入レリ」とある。この弘済の話は『日本霊異記』上巻「贖龜命」放生得現報「龜所助縁 第七」に基いているが、この部分は「時海辺人売大龜四口、禪師勸人買而放之」とあるのみで、禪師の心の内は述べられていない。このことは亀に助けられた後も同様で、『今昔』では「龜ノ我レニ恩ヲ報ストテ助タル也ケリ」ト思フニ、実ニ哀レニ貴シ」とあるのに対して『日本霊異記』では「疑是放龜報恩乎」としか述べておらず、亀の弘済への報恩とか、亀と弘済との心情の交流ということも触れられていない。

また亀の報恩について本話では山陰が「極テ憐レ也」と述べていて、『今昔』巻第十九三十話で、弘済が陸に上がって「実ニ哀レニ貴シ」と述べているのと同じことである。つまり、これら『霊異記』にはなく、『今昔』にある表現は『今昔』編者の増補によるものであり、特に人間の心理描写、あるいは人と動物との心情の交流を示す表現は『霊異記』には少なく、『今昔』がその点において

『靈異記』よりは文学性を持っているものといえよう。

また、亀が自らを語る部分を本話では

買ヒテ取テ令放メ給ヒシ所ノ龜也。其ノ後「何ニシテカ此ノ思  
ヲ報ジ申サム」ト思、年月ヲ過グルニ

とあるが、巻五第十九話では

我レハ、先年ニ買取テ放チ給シ龜也。鈎レテ、既ニ畝ニ行シ  
ヲ、買取テ放チ給ヒシウレシサヲ何デカ報ジ奉ラムト思ハレツ  
ルヲ、其ノ事ト无クテナム年来罷リ過ツルヲ

と全く同じ表現が用いられている。亀が報恩ということを手づから語る部分があるのは『今昔』ではこの二つだけであるから、その類似性は更に強いものがある。

また、海に落とされた継子が亀の甲に乗って無事生還するところは、本話で最も感動的な場面であるが、その様子は絵画的であり、次のように描写されている。

時ニ海ノ面□トシテ渡ルニ、海ノ面ヲ見遣バ、浪ノ上ニ白ラバ、ミタル小サキ物見ユ。鵜云フ鳥ナメリト思テ、近ク漕ギ行クニ、不立ネバ恠シト思テ近ク漕ギ寄セテ見レバ、此ノ兒ノ、海ノ上ヘニ打チ□テ居テ、手ヲ以テ浪ヲ叩テ有リ。喜ビ乍ラ漕ギ寄テ見レバ、大笠許ナル龜ノ甲ノ上ニ此ノ兒居タリ」とある。

この場面とよく似たものは『宇治拾遺物語』巻十四ノ四「魚養

事」<sup>⑫</sup>に見ることができる。この話は、魚に乗っている子どもであるから、次のように描写されている。

父あるとき難波の浦のへんを行に、沖のかたに、鳥のうかびたるやうにて、しろき物見ゆ。(略) 四ばかりなる児の、しろくおかしげなる、波につきてよりきたり。馬をうちよせてみれば、大なる魚のせなかに乗り

とあつて助けられた子どもの様子を、海に浮かぶ鳥にたとえている点、あるいは、その子が接近して来て捜し求めている子であることを発見するという述べ方とも、非常に類似していて、先に述べた船から首を出している亀の描写と同じく、写实的でしかも視覚的な面白さが加えられている、そしてこれらの重要な場面を生き生きと詳細に描写しているのは、原話に「口語り」の要素があったからだといえよう。

#### 四、本話の形成過程

『今昔』の編者の加筆によるものと、「口語り」における共通した描写を摘出したところによれば、原話の骨子、つまり話の核ともいえるものは、継母によって海に落とされた子が、かつて父が助けた龜によって救われたということである。この限りにおいては、父と子の関係はだれであってもいいのであるが、子の名を特に如無とし



たのは

此ノ児ヲバ法師ニ成シツ。名ヲバ如無ト付タリ。既ニ失タリシ、子ナレバ、无キガ如シト付タル也ケリ。

という命名の部分と関連しているのである。すなわち、如無という特異な名前と、海に落とされて死にかかったという話とが巧みに『今昔』の編者によって結びつけられ、説話的なおもしろさが付与されたものと考えられる。なぜなら、如無を「無きが如し」と訓み、しかも亀報恩譚と結びつけることは口承の段階では困難であると思われるからである。先に引用した「魚養事」のように「魚に助けられたりければ、名をば魚養とぞつけたりける」という部分とよく似ているが、魚に助けられた魚養というのと、亀に助けられた如無というのでは、同じ型による命名とはいい難い。前者は、桃から生まれた桃太郎とか、蛤女房、鶴女房のような元の姿を冠した名前とか、鉢かづき姫のようにその姿をそのままに付けた名前などのように民話的発想によるものに近いが、如無の場合このような形で直接には結びつかない<sup>③</sup>。やはり、如無という名前がまずあって、これを「無きが如し」と訓んだ上で、この亀報恩譚と結びつける能力を持った人達、たとえば『今昔』の編者などによってなされたものである。

このことは、本話の中心人物がだれであるかを見ることによって

今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響

も明らかなのである。本話の題だけを見ると、山蔭が主人公のようであるが、今まで見て来たように、本話は海に落とされた継子、つまり如無が生死の境から無事救われたことと、その後日譚として、憎むべき継母にも孝養を尽くし、「山階寺ノ僧トシテ、後ニハ宇多ノ院ニ仕テ僧都マデ成リ上テゾ有ケル」とあることに中心が置かれているのである。そしてこの結末の如無に関する記事は史実に即しているのに対し、山蔭については最後の総持寺を建立した部分のみが史実であるが、本話との直接のかかわりはない。また、本話の冒頭で山蔭を延喜時代の人物とし、大宰府長官赴任の事件としているが、いずれも史実ではない。しかも子の如無が宇多帝に仕えたところのに、父である山蔭を宇多帝の子である醍醐天皇時代の人物<sup>④</sup>としている矛盾を犯しているわけで、編者の目が全く山蔭に注がれていないことを露呈している。これらはおそらく、如無に話の中心が置かれたため、如無が宇多上皇に近づいていた延喜年間に合わされたものと思われる。

従って本話は如無を中心として構成されたものであり、延喜年間あるいは宇多天皇との関連を成立の背景としているのである。そして、父を藤原高房、子を山蔭とする『長谷寺靈驗記』の話が山蔭を中心として構成されているので本話とは全く違った意味において伝承されて来たものといえる。それは、『十訓抄』<sup>⑤</sup>において本話と同

じ型の話を「此事如夢僧都の物がたりとて、人ごとにしりたればこまかに不書。」とあることによっても明らかであろう。ただ、ここでいう「如夢僧都の物がたり」がすぐさま『今昔』の本話のみを指しているとは断定し難いものがある。それは、『十訓抄』の第一「可施人恵事」の他の部分に次のような話が収められているからである。

昔宇多法皇大井川に御幸の日、泉大将の烏帽子おとしたりけるに、如夢僧都三衣箱より烏帽子を取出たりけん

この話は、ほぼ同時代の伝承を伝えていると思われる『四部合戦状本平家物語』『覚一本系平家物語』『源平盛衰記』<sup>⑩</sup>には、先の亀報恩譚と共に入れられているのである。いずれも如無と宇多帝との結びつきを思わせる文章であり、如無を浄行持律の僧とも述べている。如無僧都がこの大井川で人目を驚かす行爲を行なったことが、如無の名を高めたと思われ、如無自身に、亀報恩譚が結びつけられる要素がほとんどない点は述べて来た通りである。そして大部分が、『今昔』の編者の増補によるものである事も見て来た通りだが、『今昔』の編者が原話を持ち残していた部分と考えられる亀を仏菩薩の化身ではないかということ、あるいは本話とは直接関連づけられていない山蔭が総持寺を建立したということと考え合わせると、如無については、この大井川での話だけが伝わっていたのを、既に

口語りとして存在していたと思われる『長谷寺靈験記』が採った『総持寺縁起』の初期のもの<sup>⑪</sup>、つまり父高房、子山蔭とする亀報恩譚とを結びつけ、現存のような話に作り上げたものと思われる。

## 五、本話の後代への影響

『今昔』以後の如無の伝承としてもう一つ注目したいのは、『覚一本系平家物語』『長門本平家物語』『源氏盛衰記』がいずれも、亀を助けたのを如無の実母としている点である。たとえば、『覚一本系平家物語』(巻第六)では

うがひが鰯の餌にせんとて、龜をとてころさんとしけるを、き給へる小袖をぬぎ、龜にかへ、はなされたりしが、

とある。これは典型的な継子譚の形を示すものであって、昔話でも室町時代小説と呼ばれている作品でも、継子の危難を救うのは実母の何らかの援助(鉢かづき姫の命を救ったのは実母の被せた鉢であり、後の繁昌もこの鉢とつながっているし、「坡皮」型の話でも継子を無事守る役目を果たしているのが、実母の霊である山姥である)によるものである。ただ、本話では直接の援助ではなく、鎮の報恩という形を取っていて、間接的な援助となっているが、この形も室町時代小説に見られるのである。すなわち、室町時代小説では、湖や海に捨てられた継子が、実母の霊の化したる亀によって助けられる

話があり、湖の例は『ふせや』であり、海の例は『秋月物語』である。『ふせやものがたり』<sup>⑨</sup>では

かめ、泪をなかりて、せたの橋の上にきて、我は是、君の母の、玉しゐなり、朝夕は影の身にそゐて、守つるに

とあり『秋月物語』(刊本)では「ひとひの亀は、めいと母也」とある。そして『源平盛衰記』にもっとも近い詞章を持っているのは『秋月物語』と『異本秋月物語』である。前者では

さて姫君をば、かめの、かしらにのせてまつりて、しまにさし上げる、さて姫きみ、いかなる事そと、御らんすれば、かめ、てをあわせて、なくけしきにて、かへりける、はゝ君の、たすけ給ふかや、あらありかたや、むかしの山かけの中なこん、わかき<sup>(マ、)</sup>を、かやうにあるとかや、いよく御きやうたつとく、あそはしける

とあり後の部分では「姫きみをたすけ申つるかめは、こせのはゝきみ成」とある。後者でも

浪うちぎわに大きな亀手をあわせてなくけしきにて帰りければ、姫君ふしぎやな、いかなる仏神の御たすけや、むかし山かけの中納言わかざかり<sup>(マ、)</sup>、かやうに有とこそ聞けとて(略)君をたすけ申つる亀はめいどの母なり

とある。

#### 今昔物語集の山蔭中納言説話の形成と影響

これらのうち山蔭中納言を出している『秋月物語』の「山かけの中なこんわかきを」「山かけの中納言わかざかり」という表現は『宝物集七卷本』<sup>⑩</sup>に「山蔭中納言ト申ケル人ノ若カリケル時」としてこの話を述べているのと同様であり、如無の亀報恩譚が、室町時代小説に少なからず影響を与えていたといえるだろう。

従って『平家物語』の主として語り系の文章が、亀を実母の霊とはしていないが、平安朝の伝承を室町時代へとつなぐ役割を果たしているのであり、さらにそれが近世初期の『御伽草子』の『鉢かづき』になると、形は変わるものの入水自殺した鉢かづき姫を救う存在として「山蔭三位中将」が登場するのである。

以上、山蔭中納言説話の成立と後代への影響を考察したが『今昔』の本話は口語りとして既に存在していたと思われる初期の『総持寺縁起』と、高名な如無僧都との話を編者が合わせて作り上げたものであり、山蔭について語られるのではなく如無を中心として構成されたものであった、そして奇異な体験をし、人目を驚かせた高名な僧の話として整理されていき「如夢僧都の物がたり」というような意識が形成されていったのである。また本来付属的であったと思われる戀子譚の要素は『平家』によって実母が登場し、『今昔』とは違った発想がとられることにより、室町時代小説の成立、形成とかかわっていったのである。ただ『今昔』が詳細に描写していた主人公

の心理描写や、亀との交情についてはほとんど受けつがれず、断片化していき、『御伽草子』の『鉢かつき』にわずかにその影響が見られるだけとなったのは、享受者層の変化や時代背景の違いもあると思われるが、何よりも如無とか山蔭とかの個人との結びつきがあまりにも強すぎたため、拡まりと深まりを持つ機会が与えられなかったのである。

注

- ① 『統古事談第四』『大和物語百四十三』『撰集抄卷六第四』などに断片的に登場するし、散佚物語として『山蔭中納言』と題するものがある。
- ② 本文はすべて岩波版日本古典文学大系本によった。
- ③ 島津久基氏著『近古小説新纂考説』（四二頁～四二七頁）
- ④ 山蔭は高房の次男で、如無は山蔭の七男であるから、上下の親子関係でつながっている。
- ⑤ 国東文鷹氏著『今昔物語集成立考』所収の「今昔物語集の構成」による。
- ⑥ 『万葉集・巻第七（一二三〇番）』には「ちはやぶる金の岬」とあり、『源氏物語・玉鬘』でもこの歌を引いて都から遠く離れたという感を深くさせている。後代でも『散木奇譚集（六）（七八九番）』に「首にきく鐘のみさきはつきもせずなく声ひ

ぶくわたりなりけり」とある。

- ⑦ 国東文鷹氏著、前掲書所収の「今昔物語集成立事情の一面」による。

- ⑧ 岩波版日本古典文学大系本（三六四頁）

- ⑨ 中島悦次氏著『打聞集』（白帝社版一〇八頁）

- ⑩ 注⑦に同じ。

- ⑪ 岩波版日本古典文学大系本による。

- ⑫ 注⑨に同じ。この話はこの書以外にはない。

- ⑬ 島津久基氏は前掲書四二五頁で両者を同型に属するものとされている。

- ⑭ 国史大系53『公卿補任』等によると、山蔭は仁和四年に亡くなっている。

- ⑮ 『新儀式第四』には如無を法皇近習の僧とし、『西宮記巻一』の延喜七年正月三日の条には「律師如无供法皇御茶」「律師如无、中納言源朝臣各取一捧物」とある。

- ⑯ 国史大系本による。

- ⑰ 前記二書はいずれも巻六にあり、『源平盛衰記』は濃巻第二十六にある。

- ⑱ 山蔭説話の現存最古のものは「今昔」のものであるが、『長谷寺靈驗記』の扱った最初の『総持寺縁起』（現存せず）が原

典であると思われる。

①⑨ 国書刊行会本巻第十二。

②⑩ ②⑪ ②② 横山重氏、太田武夫氏校訂『室町時代物語集第三』所収。

②③ 平山鏗二郎氏著『室町時代小説集』所収。

②④ 『大日本仏教全書一四七』所収。